九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ワークショップにおける相互変容と体験理解 : 関与観察とvitality affectの感受に基づいて

笠原, 広一

https://doi.org/10.15017/1544037

出版情報：九州大学, 2015, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式６－２）

氏　　名	笠原　広一
論　文　名	ワークショップにおける相互変容と体験理解 － 関与観察と vitality affect の感受に基づいて －
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　南　博文 副　査　　九州大学　　教授　　藤枝　守 副　査　　九州大学　　教授　　清須美匡洋

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

ワークショップは、現在教育やアート活動、地域でのまちづくり活動などの多領域で活況を呈しつつある参加者主体の実践手法であり、その効果をめぐっては、行動変化の測定や実施者の主観的な印象に拠る評価はなされるものの、参加者および実施者自身の感性的な次元での「場の実感」に定位する事が、厳密な研究法としては議論されて来ない現状があった。

本論文は、地域で取り組まれる表現活動を媒介とした子どもたちとのワークショップ体験について、相互作用のコーディング分析と平行して関与しながらの観察によって捉えられた「エピソード理解」を主たる方法として用いて、両者によって捉えられる位相の違いと、重層的に確かめられた体験の過程的な推移を分析したものである。

具体的には、序章及び第１章において、ワークショップの基本的な概念、歴史、先行研究を概観し、感性的側面への本格的言及がなされていない事を確認し、第２章において、感性的研究の視座を各種研究領域の中で整理し、第３章において関与観察と間主観性を基にした鯨岡（1997）の感性的コミュニケーションのアプローチの優位性を説いている。さらに、体験の力動感を捉える視点としてスターン（1989,2004）によるvitality affectの概念とその芸術領域への適用事例を整理して、体験の実感に根ざした本研究の方法論を第５章と第６章に呈示している。実証的な検証として絵画表現（第７章）と映像表現（第８章）という２つの領域での事例研究において、コーディング分析とエピソード記述の併用によって、ワークショップにおける相互変容と体験理解の時間展開及び力動性を分析している。さらに結果の明証性を高める方法として観察者視点の変化についての時系列分析（第９章）、およびビデオ記録の共同検証（第10章）という複数の手法によって、著者は、ワークショップ体験において生起する感性的次元への「接続」とそれに伴う情動的な接面での「充填」が、ワークショップにおいて得られる価値であり意味であるとの結論を導いている。

本研究成果は、これまで未踏であったワークショップへの感性的次元での力動過程を関与観察におけるvitality affectの動態に着目しながらそこでの変容過程を解明するという目的に対して、「接続」と「充填」という汎用性のある鍵概念を導き出した点で、ユーザー感性学にとって価値ある業績であると認められる。

最終試験

この論文について、論文調査会は、平成２７年８月２０日17時30分より、統合新領域学府

（箱崎地区旧５号館）多目的演習室において、笠原広一氏及び論文調査委員全員の出席により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。

論文内容について、笠原広一氏は論文調査委員（全員）の質問（ワークショップの創造的可能性、現代アートの理解、時代の情動性の捉え方等）に的確かつ明確な回答を行い、また、口頭又は筆答により行われた関連の授業科目等に関する調査についても、論文調査委員を満足させる回答を行ったので、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、笠原広一氏が博士（感性学）を受理されるのに相応しいと判断した。